

茂吉における「力」：「多力者」についての考察

前田，知津子
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/18359>

出版情報：Comparatio. 13, pp.25-34, 2009-12-20. Society of Comparative Cultural Studies,
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



茂吉における「力」

——「多力者」についての考察——

前田知津子

はじめに

斎藤茂吉が柿本人麻呂を「多力者」という評語によって称揚した（注1）ことはよく知られている。みずからもまた、「多力者」を意志していたことは、「私はつひに歌道に於ける多力者^{たうきしや}ではない」（注2）という言葉にあらわれている。「多力者」とは茂吉にどのようなものと考えられていたのか。本稿では、「多力者」の用例を検討することで、茂吉が考えていた「多力者」の内実を明らかにする。

茂吉の著作のうち「多力」、「多力者」の語が見える早い例は、大正二年三月「アララギ」に掲載された次の文章である。

短歌の形式は不自由である。そこに自由な心を盛るのは虚偽に陥るといふ。一応明白な理である。ところが実はその虚偽なところより力が湧いて来るのだ。虚偽の生ぜんとする刹那に其と闘ふ力から光明が放射するのである。力は障礙にぶつかつて生ずるのである。短歌の形式をいとほしむ心は力に憚る心である。短小なる短歌の形式に紅血を流通せしめんとする努力はまさに障礙に向ふ多力者の意力である。

『多力^{ウィルツールマハト}に向ふ意志』である（「35歌の形式と歌壇」）。（注3）
「多力に向ふ意志」については、それに振られた読み仮名「ウィ

ルツールマハト」からニーチェ思想の主要概念の一つである「Wille zur Macht」を訳したものであることが、すでに指摘されている（注4）。続く文章にニーチェのアフオリズムの引用があり、同じ号に掲載された他の文章にニーチェの名があがることからその関連は認められる。しかしより積極的に「多力に向ふ意志」がニーチェと結びついていることは、茂吉自身の次の文章によって確認できる。

ニイチエは晩年の書牘に『私はこの金色の秋に、私の嘗て経験した最も美しい秋に、私の生涯の回顧を書いてゐる。ただ私自身のために』とかう書いてある。ニイチエは甚く孤独を感じてゐたけれども、已に多力に向ふ意志の哲学の腹案の成つた時だ（大正九年六月「秦皮」）。（注5）

明らかに「多力に向ふ意志」が、ニーチェ哲学として把握されている。

茂吉が「多力」あるいは「多力者」を使うとき、少なくともその初期においては、ニーチェの「力」の思想が意識されていたと見てよいであろう。そしてその「力」は、「35歌の形式と歌壇」に代表されるように、歌人茂吉としては当然のこととして、多くが短歌をめぐる問題と密接に関連付けられている。

あらためて「35歌の形式と歌壇」から「多力（者）」に拘わらず「力」の語を拾うと、この短文のうちに、「虚偽なところより力が湧いて来る」、「闘ふ力から光明が放射する」、「力は障礙にぶつかつて生ずる」、「力に憚る心」、「努力」、「意力」などと用いられ、「力」という単語への執着あるいは「力」そのものへの憧憬が

看取される。「多力者」、「意力」の読みについては、後年の文章に、それぞれ「たりきしや」、「いりき」(注6)と読み仮名が振られている例がある。

一 「多力」という訳語について

用例の検討にすすむ前に、「多力」と訳した経緯について考えてみたい。それというのも「Wille zur Macht」は、現在では、「権力」への意志」あるいは「力への意志」の訳語で目にするのがほとんどであり、過去に遡ってもこの場合の「Macht」を「多力」と訳した例は、茂吉以外に確認できないからである。ニーチェ著作の中で、「Wille zur Macht」という言葉が初めて見えるのは、『ツアラトゥストラ』第一部の「千の目標とひとつの目標」の中の、諸民族における善悪は「彼らの力への意志の声なのだ」という一節においてである(注7)。

『ツアラトゥストラ』の日本語全訳(生田長江)が刊行されたのは明治四四年一月であり、すでに茂吉も読んでいたと思われる。それによると該当箇所は、「それは威力に対する其意志の声なり」と訳され「威力」という訳語があてられている(注8)。また、茂吉が注目していた和辻哲郎の著作『ニイチエ研究』(大正二年一〇月)においては、「権力意志」と表現されている。参考として記すと、当時茂吉が活用していた『言海』(大槻文彦、明治二二―二四年)、『日本大辞林』(物集高見編、明治二七年六月)(注9)には「多力」という語は収載されていない(注10)。そこで別の視点からこ

の問題を考えたい。

茂吉は、「文学の師・医学の師」(昭和一七年三月「婦人公論」)(注11)のなかで、森鷗外、徳富蘇峰とともに幸田露伴の名をあげ、「露伴先生は私の少年時代からの恩であるが、昭和九年になつてはじめて親しく先生の嚆^{けいがい}に接することを得た」と記している。「少年時代からの恩」とは、「中学生時代から露伴崇拜で、丁度高等学校に入学したころ、読売新聞に連載せられてゐた、長篇小説、「天うつ浪^{そら}」を切抜いて綴つたり」した文学を通じての薫陶をさして言うのであろう。同じ文章に、『風流微塵蔵』「さゝ舟」の中に見える一節「今落ちかかれる日輪紅く」に感銘をうけた時期を「中学校の二年生(四級生)」の頃であつたとも記し、また別に、露伴の処世訓的な文章は「益軒十訓などの文と違ひ実世間的な教訓を織りまぜたものであつて、いつしか少年の私の心に沁み込んで行つた」(注12)と振り返っている。

右に示した回想によつて知られるように茂吉は少なからず露伴に親炙していた。茂吉における露伴の影響については、茂吉・露伴周辺の人びと、また研究者それぞれの立場からいくつかの発言が見られるが、以下に示す二つの意見に代表させることができよう。一つは土屋文明の「少年の時の愛読から晩年機会を得て露伴に親しくしたが、その影響は案外少ないように見える。用語の癖ぐらにとどまっているのではあるまいか」(注13)とする発言であり、一つは北住敏夫の「露伴からは何よりも意力的な処世態度や人生観を学び取つたのである」(注14)とする発言である。一見、対立するかに見える意見も、土屋発言を文学上の立場から、北住

発言を実生活上の立場からの見解と理解すると、両意見は相互補充の関係にあると見なすことができる。両氏の発言のうち、ここでは、「用語の癖」、「処世態度」において影響を受けたとする見解に注目しておく。

ここまで茂吉の露伴に対する態度を示し、土屋・北住両氏の意見を引用したのは、茂吉における露伴の影響を確認するためである。このように見てくると、茂吉が少年時代に読み、影響を受けた露伴著「靄護精舎雜筆」其二十六に見える一節、「忍辱は多力なり」(注15)が、本稿においては重要な意味を帯びてくる(注16)。「多力」の語から、それを駆使する者の謂いである「多力者」の語までの距離はわずかである。

後年茂吉は、幸田露伴におけるニーチェの影響について次のように述べている。

此思想(永遠回帰の説——引用者)の如きは既に先生が初期の小説に於て幾たびも取扱はれたものであつた。先生の外国文学接触は多く英語を通し、ニイチエの場合でも英訳に拠つたものだが、その摂取の有様が最初から同化的なので、西洋の香をば批評家が見免すのである(昭和十三年六月「文学」)。

(注17)

露伴に英訳を通じてのニーチェ摂取をみとめる発言である。また、『幸田露伴集』(東方書局、昭和二十二年一月)の「解説」で次のように述べる。

翁(露伴——引用者)の業績を総覧すれば、埃及的・希臘的・羅馬的即ち西方的でなく、日本的・支那的・印度的即ち東方

的である。されば長篇天うつ浪にニイチエのツアラストラが説いた永遠回帰説を織込ませても、その浮んで来るところは三世輪廻の色調であつた。(注18)

この文章と先に示した「中学生時代から露伴崇拜で、丁度高等学校に入学したころ、読売新聞に連載せられてゐた、長篇小説、「天うつ浪」を切抜いて綴つたり」したとの述懐を合わせて考えると、「天うつ浪」の翻訳が茂吉における間接的なニーチェ受容の経路としてあつたことが見えてくるのであり、露伴に傾倒していた茂吉の詩囊に蔵された「多力」の語が、ニーチェの「Macht」を訳する際に選ぴとられたとの推測も不当ではないだろう。

以上、「多力」が、露伴から受容した語彙の一つである可能性を示した。また、冒頭に示した「35歌の形式と歌壇」に見え、これ以後、茂吉の文章に散見されるようになる「紅血」の語について述べておく。この単語は現在ではあえて、誰の影響と論うまでもない普通名詞であるとも言える。しかし、当時においてはどうかあつたか。少なくとも、前記の『言海』、『日本大辞林』に未収載である「紅血」が、露伴著『努力論』(明治四五年七月)中の「運命と人力と」に見える語であることは注意されてよいであろう。

二 多力者とは何を為し得る「力」か

実際に「多力者」の用例を見ていく。

短歌にはこの詩形特有の『いのち』がある。(中略)／人間としての我等の生命がこの詩形特有の『いのち』に融合し、

乃至如是光明を撰取するに方つて、あらゆる障礙を燃燒し盡す多力者の意力が無ければならぬ（大正二年七月「アララギ」。

（注19）

右の文章には、「35歌の形式と歌壇」に見えた「多力者の意力」の表現が用いられ、ここで多力者は、詩形特有の「いのち」に融合し、障礙を燃燒し尽くし得る「力」の意味で使われている。

次にあげるのは、古泉千樫の短歌「たたなづく稚柔乳のほのぬくみかなしきかもよみごもりぬらし」に対する評言中に見える例である。

先づ第一に事象を重んずる。（中略）現世の事象を飽くまで見つめる事を知つてゐる。見つめ得る多力者である。『稚柔乳のほのぬくみ』なんかでも我等ならば軽々に過ぎて仕舞ふ処をちやんと落付いて觀察してゐる（大正三年九月「アララギ」。

（注20）

見つめ得る者が多力者であるとする。茂吉の歌論である「実相観入」を想起させる文章であり、明らかに、事象を見つめ得る「力」が重視されている。

次の例では「力者」と表現されているが、内容から判断して「多力者」と同義と見てよい。

「生くる日に」の作者は生を凝視し得る力者である。又物の呼吸、物の命を極めて敏に確かに捉へ得る力者である。此事は一卷全体を通じて言ひ得る。故正岡先生は物の命を捉へよ然らば歌は易々として出来ると云はれた。夕暮氏は此言を実行してゐる（大正三年十一月「アララギ」。（注21）

前田夕暮の歌集『生くる日に』に対する評であり、生を凝視し、物の命を捉え得る「力」を評価している。

次の例に移る。

此歌のいい所は、（中略）考へた歌でなく眼前に開展する自然と呼吸を共にして計らひも何もなく、親鸞の謂ふ『自然』の境に到つた点にあると思ふ。抒情詩だからと云つて主観を露はに出して単に悲しい痛ましいだけでは物足りない。具体化が余程心を集中せしめて淬を盡く焚燃せしめ得る程の多力者でなければ六つかしいからである（大正四年八月「アララギ」。

（注22）

「此歌」とは、島木赤彦の「日の下に妻が立つとき咽喉長く家のくだかけは鳴きゐたりけり」を指す。茂吉はこの歌を評して、目の前の自然と同化し親鸞の「自然」の境地に到達した一首であると言ひ、それを可能にしたのは、心を集中させ淬をことごとく焚燃させることのできる「力」であると言つてゐる。ここで述べられている「心の集中」は、茂吉の発言のうちにしばしば見られ、例えば次のように用いられている。

心せまり来て、歌をなさむことを欲しても、それは未だ混沌の衝迫で結象整頓の境でない。それゆゑいかにしてこれを歌になさむとするかを知らない。はりつめて心に把持することとしばらくにして結象おのづからにしてなつてくる。この心力の集注、性命の醞釀、群肝の清澄はうれしいとおもふ（大正三年二月「アララギ」。（注23）

この文章では、「心力の集注」と表現され、茂吉によればそれは「混

沌の衝迫」を「はりつめて心に把持」し続けることである。後に、心が集中してきた場合の内的状況を次のように説明している。

予の心が興奮し集中して来て、本氣に歌を詠まうする刹那

はまさしく一腔の火炎である。うちに漲り切つた力の一团である。けれどもこの火炎力団も未だ言語そのものではない。

多力者に苦あり非力者には苦あることなしの一語はこの際いちじるしく光を放ってくる。苦悩と歎息との裏にあらゆる障礙を焚焼し盡すとき、予の命はぼつりぼつりと言語に乗りうつて来る（大正四年一月「アララギ」）。（注24）

心の集中が高まり、短歌を詠もうとする瞬間は火炎力に漲り、それによってあらゆる障礙が焚焼され尽くすときに「命はぼつりぼつりと言語に乗りうつ」るのだと言う。

茂吉は、明治四二年一月「アララギ」に、露伴の「文人の自ら保つべき態度」の中の文章として、「学者は苦あり不学者は苦ある事なし」を二重の圈点をもつて引用している（注25）。この一節と、茂吉の「多力者に苦あり非力者には苦あることなし」との間の類似は容易に認められよう。「アララギ」に茂吉が引用した露伴の文章は、佳詩は苦吟したからといって出来るものではないが苦吟の中からしか佳詩は生まれない、と要約でき、それが右の引用文に踏まえられていることを考慮すれば、「いちじるしく光を放ってくる」ものとは、みずからが感銘を受けた露伴の一節ではなかったか。

次に検討する文章には特に注意を払いたい。

もともと短歌の言葉は確かでなければならぬ。それが吟味す

ればする程、確かさが滲み出て来る方がよいと思ふ。僕がそんな多力者だと自称するのではない（大正八年九月「紅毛船」）。

（注26）

ここにおいての多力者は、短歌の言葉を確定し得る「力」である。

一読した限りでは、他に適切な言葉があるように思われても、吟味すればするほどその言葉以上にふさわしい語句がない。読者にそう思わせる一語を据えることのできる、そういった「力」である。別のところで、「短歌の言葉はあやふやであつてはいけない」

（大正三年一月「アララギ」）（注27）と言ったことと同様である。

実作者の立場からは、結局はこのところに帰着するのではないだろうか。茂吉における多力者とは、言語化する力量に大きくかわる問題であるといえる。先に明らかにしてきたような種々の「力」、即ち、詩形特有の「いのち」に融合し障礙を燃焼し尽くし得る「力」、見つめ得る「力」、生を凝視し物の命を捉え得る「力」、心を集中させ滓をことごとく焚焼させ得る「力」、これらはみな、短歌の言葉を確かなものとして定着させる内的過程を言葉によって説明しようとしたものに過ぎない。

これに関連して、茂吉に近く接しみずからも歌人として作品を残した佐藤佐太郎に次のような発言がある。

言葉を駆使する力量が足らずに、作品を残さなかった人も必ずあるであらう。さうなればこの自然をこのやうに表現した作者（茂吉——引用者）の言語駆使の力量をも顧みなければならぬ。そして一語一語は別に奇もない一語一語でありながら、句々の間に滲むやうにして全体から束になつて放出す

るところの勢に讃嘆しなけれならない。(注28)

茂吉が述べた「確かさが滲み出て来る」言葉についての理解を助ける右の発言は、茂吉同様、多くの後進を育て、他の語に代えることのできない一語を短歌の上に実現することの困難を深く理解していた歌人の言葉として重みを持つ。

ところで冒頭に述べたように、茂吉は柿本人麿呂を「多力者」として賞讃した。「柿本人麿私見覚書」において、人麿呂は、ニ―チェ思想に関わるディオニュソスの性質をもつ「多力者」として論じられている。その観点からすれば、茂吉が「多力者」といった場合、単に力量豊かな者の意にとどまらず、ニ―チェ的な意味における力強い生命力を帯びた者であることになる。これについては、茂吉における重要な問題であるため、機会をあらためて論述したい。本稿では、「ディオニュソス」には触れず、「多力者」の用例の範囲において検討するにとどめる。

茂吉は人麿呂の長歌を「力」あるものと言い、「多力者が気を抜かず一気にやつてのけたと謂ふやうなものであつた」と述べ、その代表作として「過近江荒都時柿本朝臣人麿作歌」をあげ、次のように評している。

これなどは、天爾遠波^{てにきは}の使ひざまなどは実に達人の境で、その大きな波動をなして音調の進んでゆくさまは心ゆくばかりであり、西洋の詩などと違つて連続性であるにも拘はらず、そこに微妙の休止と省略と飛躍と静止と相交錯した変化を保たせながら進行せしめてゐるのはどうしても多力者の為業である。(注29)

「天爾遠波の使ひざま」を高く評価している。これも先に述べた言語を駆使する力量の範疇であろう。この場合の多力者は「天爾遠波」の運用に優れた「力」と解される(注30)。

以上、「多力者」という「力」を茂吉の発言にもとづいて検討した。ここで比較のために多力者でないと茂吉が言つた一例をあげておく。

由来折衷とか穩健とかを標榜する者に限つて魯鈍者は無い。みんな惻巧である。万葉もよし古今もよし言道もよし晶子もよしと云ふんだらう。然し奇妙にさういふ者に限つて多力者は無い。それだから、その折衷といふ奴はつまり露伴が喝破した様に『胡蘿蔔、椎茸、蓮根、慈姑、隱元豆の打交りたる五色の反吐』に過ぎない事になるのだ。然も本人は大多力者のつもりで円融無礙に折衷し得たと思つてゐる(大正二年二月「アララギ」)。(注31)

惻巧に折衷し得る者は多力者でないといい、自論を補強するため露伴の文章を引用している。「柿本人麿私見覚書」の中に、右の文と類似の表現がある。該当箇所を次に示しておく。文意としては、人麿呂崇拜を表白したものであるが、それだけに止まるものではないと考えるからである。

この私の人麿尊敬は、人麿もよし業平もよし貫之もよし定家もよし景樹もよし晶子もよしといふのではない。さういふ論は歌の歴史でも云々するときにいふべきことで、いよいよといふときには私は決してさういふことは云はない。私の人麿尊敬はいよいよとなれば人麿でなければならんといふところ

まで行つてゐる。(注32)

「私は決してさういふことは云はない」という言葉のうちには、折衷や穩健を潔しとしない茂吉の氣概が感じられ、その口吻からは多力者としての自負がうかがわれる。

三 新氣運を生み出す「力」として

また、「多力者」は茂吉において「氣運」と結びついている。次にあげるのは、「短歌は滅亡せざるか」の設問に應じて執筆されたもので、歌壇が変わるためには、「多力者」の出現が必須であると述べている。

但しそれにはやはり『多力者』^{たりにきしや}の出現が要るのである。何かに飽和されたやうな氣運から多力者が出で、その多力者を中心として一つの新しい氣運が形成されるのである(中略)／
芸術本来の面目は、『多力者』^{たりにきしや}の出現奈何によつて極まるのであつて、これは動かすことは出来まい。(中略)その『多力者』といふものも時代乃至国土の雰囲氣から取離すことが出来ない(大正一五年七月「改造」)。(注33)

この文脈において多力者は、新氣運を生み出す「力」と解釈できる。先に述べた多力者を個別的状況における「力」とすれば、この場合の多力者は、一潮流の形成に關与し時間軸において把握される「力」と言えよう。

實際、旧來の「根岸派流に安住してゐてはいけない」と感じた茂吉は、新氣運の醸成を企図した。具体例として、明治四四年に

「アララギ」の編集を手がけるようになってからの阿部次郎や木下太郎への執筆依頼をあげることができる(注34)。当時の様子をふりかえつて、茂吉は阿部に依頼した経緯を次のように記す。

阿部氏に御願するようになったのは本号(明治四四年九月「アララギ」正岡子規十周年記念号——引用者)がはじめである。

かういふ事も編集者としての私の当時の意向が分かるのであつて、私は阿部氏の文章を前から愛読し、阿部氏を尊敬するのあまりその文章をもらつて、アララギの新氣運を成就する力とせむと希つたのであつた(昭和八年一月「アララギ」二十五周年記念号)。(注35)

歌壇外部に執筆を求め、アララギ内に新風を入れることによつて新氣運をつくり、アララギ短歌の、ひいては歌壇の閉塞を打破しようとしたのであらう。地味で時間を要するものの、着実な方法と言える。「本号」にあたる子規十周年記念号には、その阿部の「痴者の歌」(隨筆)が掲載されたが、明治四五年五月「アララギ」に掲載された同じ阿部の「象徴主義の話」(評論)は、特に注意を引く。リップスの感情移入説にもとづき、美学上の象徴と芸術上の象徴の違いが論じられ、ホーフマンスタール、アーサー・シモンズの言説が引用されている。この文章は、象徴的短歌に否定的であつたアララギの歌人にいかに読まれたのであらうか。

阿部の引用したシモンズの *The symbolist movement in literature* が岩野泡鳴によつて訳され『表象派の文学運動』(新潮社)として刊行されるのは、一年あまり後の大正二年一〇月(茂吉の第一歌集『赤光』と同時期)のことである。その翌月に泡鳴は五日会(後

の十日会)を發足した。両者の關係については、「岩野泡鳴氏を中心とした十日会といふのに私も毎月出席したりして」(注36)いたという茂吉の言葉を引いておく。

次に示す事項も阿部に信頼をよせていた茂吉の試みの一環として捉えられる。阿部は明治四五年二月四日の「読売新聞日曜附録」に「内生活直写の文芸(再び)」と題する文章を寄せた。茂吉はその文章に感銘を受け、二度にわたって「アララギ」に抄出転載している(明治四五年四月(注37)および大正三年七月(注38)。このことは、茂吉における阿部の影響力の大きさを裏付けるとともに、当時における茂吉の関心の所在を知る上で注目される。

大正三年七月掲載の文章から阿部の文章部分を引き写す。

デイオニゾスの徒は一切を精神に翻訳して精神生活の内容として価値あるがゆゑに之を描写する故に彼等は其文芸をして自己の内生活と共に舞踏せしめんとする。宇宙の一切を招致して自己と共に舞踏せしめんとする。三千世界が我が心と同じリズムを打つて流動せん事を要求する／内生活直写の用に堪へんが為めには劇も詩も小説も論文ももつと内化されなければならぬ。もつと正直な素樸な直接的なものでなければならぬ。(注39)

阿部の文には、「精神生活の内容」や「内生活直写」といった表現が見られ、子規が提唱した客観写生の説のうちに解消できない要素を含んでいる。そこにはニーチェの思想の反映が見られることも押えておくべきであろう。

さて、茂吉が新氣運を欲した背景とその運動の結果に触れてお

きたい。歌壇全体に関わる問題としては短歌否定の思潮があり、一結社アララギの立場からは、「当時の日本歌壇からは殆ど全く黙殺されてゐ、森鷗外等少数の専門家をのぞくのほかは、アララギの存在すら知らないといふ状態にあつた」(注40)というところに理由を求めることができる。無論、同人の中には先に述べたような茂吉の編集方針を「邪道」と見なし快く思わない者もいた。そしてそれは左千夫との対立を際立たせる因子ともなつた。それにもかかわらず断行した結果はどうであつたか。茂吉は次のように分析する。

アララギの歌風はいちじるしく一般歌壇に進出し、アララギ流の観方、アララギ流の表現法、アララギ流の習癖が一般歌壇にひろまつた。それが毎月殆ど加速度的に進行したと謂つていい。アララギは遂に日本歌壇の主潮流を形成するに至つた(後略)。(注41)

新氣運の醸成を果たし得たとの判断である。そして「主潮流を形成するに至つた」その年を大正四、五年に定めている。

結び

茂吉における「多力者」の内実を明らかにするためにその発言に即して考察をこころみた結果、大きく二種の意味合いで考えられていることが確認された。一つは、実作者の立場から要求される「混沌の衝迫」を言語化する「力」であり、一つは時代の雰囲気とかかわり、新たな氣運を形成する「力」である。しかし問題

は残る。本文中で触れたように、人麻呂を「多力者」と言うとき、それはニーチェのディオニュソス的なものと結びついている。人麻呂における「多力者」の内実を明らかにするためには、茂吉が「ディオニュソス」に持たせた意味が考察されなければならない。

〔付記〕

一、本稿における『全集』は、『斎藤茂吉全集』（全三六巻、岩波書店、昭和四八―五一年）を指し、特に断らないかぎり茂吉作品の引用は同集に拠った。

一、引用文は、文意を損なわないかぎり、適宜通用の文字に改めた。

（注1）「柿本人麿私見覚書」（『柿本人麿（総論篇）』のうち第四、岩波書店、昭和九年一月）。『全集』巻一五、一六七頁。

（注2）大正一四年四月に改造社より出版された自選歌集『朝の螢』の巻末記である。後に、「朝の螢」巻末の小記」として『全集』巻一一所収。七五四頁。

（注3）『全集』巻九、五三頁。

（注4）小堀桂一郎「斎藤茂吉における「多力」への意志」―「深

処の生」の支えとしてのニーチェ―』『近代日本の思想と芸術II』（東京大学出版会、一九七四年六月）。『付記』によると、同論文は、『全集』月報二一五、七、八号に連載した「斎藤茂吉とニーチェ」を加筆訂正したものである。

（注5）「獨語抄―歌の雑誌」『全集』巻一一、六四九頁。

（注6）『全集』巻一一、三八九頁。

（注7）日本語訳の引用（本文）は、『ニーチェ全集』（白水社、一九八二年一月）に拠る。

（注8）参照できた大正一三年三月の『ニーチェ全集』第五編一〇版（新潮社）では、「そは力への彼等の意志の声なり」と改められ、「威力」は「力」に改訳されている。

（注9）茂吉の使用した辞書類については、『全集』巻一一、六七頁及び一二九頁によってその一端をうかがうことができる。

（注10）現在容易に手にできる辞書類には、「たりよく」の読みで「多力」が収載されている。『日本国語大辞典』（第二版、小学館）、『広辞苑』（第五版、岩波書店）など。

（注11）『全集』巻七、三一五頁。

（注12）「三筋町界限」『全集』巻六、四四一頁。

（注13）『折り折りの人I』（朝日新聞社編、昭和四一年一月）、一八頁。

（注14）『阿部次郎と斎藤茂吉』上（桜楓社、一九八四年一月）、二二頁。

（注15）これについて、藤岡武雄は「茂吉の最も愛好した」一節

であると述べ、北住は「茂吉の胸に深く刻み込まれた」一節であると述べている。前者は、「斎藤茂吉と幸田露伴——露伴文学の影響について——」「日本大学文理学部（三島）研究年報」第二〇輯（昭和四十六年十二月）、九七頁。後者は、（注14）と同書、一二頁。

（注16）茂吉は、『ひげ男』（博文館、明治二十九年十二月）の附録として収録されていた「露護精舎雜筆」を読んでいる。

（注17）「露伴先生に関する私記」『全集』巻二四、八七頁。

（注18）「幸田露伴」『全集』巻二四、二八六頁。

（注19）「万葉短歌鈔」『全集』巻一一、三〇四—三〇五頁。

（注20）「アララギ前号歌評」『全集』巻一一、三七四頁。

（注21）「生くる日に」雜感『全集』巻一一、三八〇頁。

（注22）「切火合評の中」『全集』巻一一、四〇二頁。

（注23）「50怨敵」『全集』巻九、六八—六九頁。

（注24）「92詞の吟味と世評」『全集』巻九、一二六—一二七頁。

（注25）「漫言其の一」『全集』巻一一、三六頁。

（注26）「歌評」『全集』巻一一、五七四頁。

（注27）「45動く動かぬ」『全集』巻九、六六頁。

（注28）「斎藤茂吉研究」（日本図書センター、一九八四年九月）、六二頁。藤岡武雄「解説」によると、同書は、昭和三十二年一〇月（宝文館）の刊行がはじめである。『斎藤茂吉全集』（全五六巻、岩波書店）の「完結直後の出版であり、当時これからの研究に、多くの手がかりや示唆を与えた書」である。

（注29）「柿本人麿私見覚書」『全集』巻一五、一八七頁。

（注30）「露伴がいつぞや、『学者に苦あり』と云つて文を行つたことがある。歌人の『苦』は一つの天爾遠波の苦にある」との発言もある（「氣運と多力者と」『全集』巻一一、八九五頁）。

（注31）「新月」を読む記『全集』巻一一、二六七頁。

（注32）『全集』巻一五、一七三頁。

（注33）「氣運と多力者と」『全集』巻一一、八九二頁。

（注34）「思出す事ども」（大正八年一〇月「アララギ」）、『全集』巻五、三八頁。なお、後述にあがる大正三年には、阿部・李太郎のほか、北原白秋・室生犀星・柳澤健・河野慎吾・若山喜志子・山村暮鳥・尾山篤二郎・萩原朔太郎・西村陽吉の寄稿を得ている（「アララギ二十五年史」『全集』巻二一、四六〇頁）。

（注35）「アララギ二十五年史」『全集』巻二一、四二八頁。

（注36）「アララギ二十五年史」『全集』巻二一、四八〇頁。

（注37）「雑俎」『全集』巻一一、一八三—一八五頁。

（注38）両者は全く同じというわけではなく、後者の掲載分は縮小されている。前者には、「アポロ型」に関する引用が見られたが後者からは除かれている。

（注39）「短歌雑論—題目数個」『全集』巻一一、二九七頁。

（注40）「アララギ二十五年史」『全集』巻二一、四〇五頁。

（注41）「アララギ二十五年史」『全集』巻二一、四七七頁。